

便利さを求める前に

上 廣 榮 治

改めて言うまでもありませんが、世の中、何から何まで便利になりました。私の学生時代には、急行列車で十八時間もかかった東京―広島間が、いまでは新幹線で四時間です。

ある日、訪ねてきた友人が私の顔を見るなり、「さつき食事をしたレストランでトイレに入ったら、何もしないのに蓋ふたが上がった。思わず声を上げそうになったよ」と大発見でもしたように言うのです。「いまごろ知ったの？」と応えた私も、はじめて自動で開く蓋ふたに遭遇さうごうしたときには心底しんぞこ驚いたものでした。

洋式トイレは文字通り西洋生まれのものです。当の西洋人が日本に来てまず驚くのが、このトイレだといっています。まったく独自の進化を遂げているからです。海外では自動開閉式の蓋どころか、蓋そのものが付いていない便器べんきが一般的です。ヒーターの入った便座もめずらしいらしく、かの歌姫のマドンナが再来日したとき、「日本の温かいトイレシートが恋しかった」と発言したのは、よく知られています。

洋式トイレの究極の装置といえば温水洗浄装置です。この装置も元は海外で開発されたものだそうです。

が、日本のメーカーによつて徹底的に改良され、いまではわが国の専売特許のようになっていきます。その開発史をひもとくと、温水をちようどよい場所に当てるための調査と工夫、水温の制御など、文字通り身体を張った日本人の「ものづくり」の徹底ぶりがよくわかります。

人は「便利」であることを求めます。それは自然なことですし、企業の研究開発のバネにもなります。とりわけ日本人はその徹底性において、傑出した能力を発揮してきました。しかし、次から次へと提供される便利さに慣れていくなかで、私たちは何か大切なものを置き忘れてきているのではないかと思うのです。

いまでは、どの町にもあるコンビニエンスストアは、文字通り「コンビニエンス(便利)な店」です。そして広くはない空間に、食料品店は言うにおよばず、酒屋、雑貨屋、化粧品店、本屋、宅配便窓口、そして銀行までもが揃っているようなものですから、これほど便利なものはありません。

「コンビニ症候群」という言葉があるそうです。都会で一人暮らしをしている若者たちが、一日に一度はコンビニに行かないと落ち着かない症状をいうのだそうです。深夜のコンビニで雑誌を立ち読みしている人々をよく見かけますが、彼らもまたそこで心の安らぎを取り戻しているのかもしれない。

東京に住むある家族が実家に帰省したところ、大学生の息子さんがコンビニの所在を気にしはじめ、その地域にはないとわかると、「こんなところには三日もいられない」と言つて東京に帰つてしまったという話を聞きました。これはさうとう重度のコンビニ症候群です。便利さに慣れすぎて、その機能が目の前から消えてしまったとき、必要以上に不便さと不安を感じてしまうのでしょうか。「今日の便利は明日の不便」とはよく言ったものです。

深夜だろうと、お腹がすいたら食べ物を買うに行くことができる。電池が切れればすぐに補充できる。洗濯をしなくても夜中に着替えの下着や靴下を買つてくればいい……。それはたしかに便利です。しかし、何

でもいつでも苦勞せずに入ることには慣れてしまうと、人は我慢をすることも、計画的に何かを達成することもできなくなってしまう。その結果、コンビニがないだけで強い不安に駆られてしまうのです。

同じように、近頃「スマホ症候群」も増えています。いつもスマートフォンで端末で社会とつながっていないと不安で、四六時中スマホを手放せずに、肩こりや首の痛みに悩んでいる人たちのことです。

コンビニ症候群やスマホ症候群を笑っている人も、携帯電話を忘れて外出し、大いに困ったことがあるのではないだろうか。最近は駅などで待ち合わせをするときも、駅のどこで落ち合うのかを決めずに、駅に着いてから携帯電話で連絡を取り合う人が多いといえます。待ち合わせの時間さえもルーズになっているようです。かつては、時間になっても相手が現われなければ、何かあったのではないか、場所を間違えたのではないかと心配しながら、あと十分、あと五分と辛抱強く待ったものです。だから遅れるわけにはいかなかったのです。いまでは、「十五分ほど遅れそうだけど、どこへ行ったらいい」などとメールをすればすむのです。待つ側も「どうせ連絡が入るだろう」と、のんびりとコーヒースタンドに立ち寄りたりしています。このような現代風待ち合わせは、お互いに携帯電話を持っていることが前提です。それを忘れてしまったら万事休す。「今日の便利は明日の不便」となるわけです。

なんらかのトラブルでデータが消えてしまったパソコン。地震でエレベーターが停まってしまった高層マンション。大都会の停電など、いずれも「便利さ」ゆえの「不便」です。

一九一一年（明治四十四）年といえますから、いまから百年も前のことです。夏目漱石が「現代日本の開化」と題する講演をしています。明治以降、次々に押し寄せる西洋文明を未消化のままに呑み込んで、得意になっている日本人に対する危惧の論です。

漱石によれば、——本来の文明化は、蕾がやがて花開くように、きちんと段階を踏んだ自然なものであ

るはずだ。ところが近年の急速な文明の「開化」は、外から次々と新しい波が押し寄せてきて、目前の波の本質を見極める暇もないうちに、もう次の新しい波に乗り換えなければならないせわしなさである。それは、食膳の料理を味わい尽くすどころか、どんな料理が出ているのかさえ定かでないうちに、もう次の新しい膳に置き換えられているようなものだ。日本人は軽薄な得意顔をやめて、その「空虚さ」をこそ自覚すべきだ、というのです。

ここで「開化」を「便利化」と言い換えれば、身の回りにあふれている便利さを闇雲やみぐもに追いかけている現代人の姿と重なります。そしてその姿には、やはり「空虚」の感がつきまといまいます。

また漱石は言っています。どんなに開化が進んでも、生存の苦痛は変わらない。いや開化が進めば進むほど、生存競争は激しくなる。生活は便利に贅沢ぜいたくになっていっても、幸福が増しているわけではない、と。「便利さ」と「幸福」とは別のことなのです。便利さや贅沢は外側の形であり、幸不幸は私たちの内なる心の問題なのです。

ふつう、人はいちど手にした「便利さ」を手放すことができません。むしろ、より多くを求めて限りというものを知りません。しかし、便利になればなった分、多くのものを失います。車は歩く力を、エアコンは寒暖に耐える力を、あふれる情報は気づく力を弱めます。物の豊かさが心の豊かさを失わせていくように、です。

だから私たちは毎朝誓うのです。「不足の思い」を抱かず、「三つの無駄」を排することを。便利さや物の豊かさではなく、自分自身の内なる精神の充実を目指すのです。

より便利に、より豊かになっていくことは、人間活動の必然であり自然なことです。ただ、人間にとってもっと本質的で大切なことがあるということを決して忘れてはならないのです。